



生涯学習に資する音楽鑑賞の手引き作成の試み： 音楽演奏会における配布用プログラム冊子の構成の 工夫を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山内, 芳春, 芳賀, 均, 千葉, 圭説 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006711

生涯学習に資する音楽鑑賞の手引き作成の試み

— 音楽演奏会における配布用プログラム冊子の構成の工夫を通して —

山内 芳春・芳賀 均・千葉 圭説*

北海道教育大学旭川校

*北翔大学

Making Music Appreciation Guides that Contribute to Lifelong Learning:

Composition of Program Booklets for Distribution at a Music Concert

YAMAUCHI Yoshiharu, HAGA Hitoshi and CHIBA Keisetsu*

Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

*Hokusho University

概 要

クラシックの音楽演奏会の会場には、その独特な雰囲気が漂い、一部の人の楽しみという印象がもたれることもあり、初心者や馴染みの薄い者にとっては敷居の高いものとなっている可能性がある。

本稿では、生涯学習に資することを意図した、音楽演奏会における冊子（配布用プログラム）の構成に関する工夫について述べる。

配布用プログラムの試作と改善に取り組んだ結果、「配布用プログラムには一定のニーズがあること」「配布用プログラムがあることで音楽に親しみやすくなること」「聴衆にとって比較的関心の高い項目は『曲目解説』『作曲者についての説明』『楽曲のポイント』の三点であること」がわかった。

配布用プログラムを通して、聴衆が、得た知識を活用して演奏を聴くことができるようにすることで、演奏する側がクラシック音楽に対する敷居を下げることができると考えられる。また、音楽に対する興味・関心の薄い聴衆にも、そうした状況を改善されることができれば、生涯学習へとつながっていく可能性があると考えられる。さらに、本研究で得られた知見は、学校における音楽鑑賞の授業に活用することができると考えられる。

1 はじめに

クラシックの音楽演奏会の会場には、その独特な雰囲気が漂っており、一部の人の楽しみという印象がもたれることもあろう。このことは、西島央氏による研究¹⁾によって、その裏付けがなされており、初心者や馴染みの薄い者にとっては敷居の高いものとなっている可能性があるといえる。

日本人の多くは、小学校・中学校の9年間に亘って、必修という形で学校で音楽科の授業を受けている。生涯学習社会において、「人々の生涯学習の基礎を培うためには、特に初等中等教育の段階において、生涯にわたって学習を続けていくために必要な基礎的な能力や自ら学ぶ意欲や態度を育成することが重要」²⁾といわれ、学校の担う役割は大きい。しかし、学校の音楽科には、「学校音楽校門を出ず」という言葉が示すとおり、学校における学習が必ずしも学習者の内面に根ざしたものになっていないという現実がある。生涯に亘って自ら音楽に働きかける態度を身に付けることができていないと考えることができる。

本稿では、生涯学習に資することを意図した、音楽演奏会における冊子（配布用プログラム）の構成に関する工夫について述べる。

なお、演奏会において配布される冊子の名称を「公演プログラム」としている文献³⁾があるが、「公演プログラム」という名称は、演奏会自体の演目や構成、番組という意味も含まれると考えられるため、本稿では、演奏会当日に配布される冊子を「配布用プログラム」と称することにする。

2 生涯学習に生かすために

(1) 生涯学習

1960年の第2回世界成人教育会議で、成人教育のあり方が議論され、教養主義を脱して「成人教育」概念の拡大が図られた。それを踏まえ、1965年に開催されたユネスコの成人教育国際推進委員会で提唱されたP＝ラングランの「生涯教育」という理念から⁴⁾始まり、我が国では学校教育にお

いて、平成元年の学習指導要領、平成8年の中央教育審議会答申で示された「新しい学力観」「生きる力」として継承されてきた。これらは、「自ら知覚した対象や課題に働きかけ、それを認識・解決する意欲・意志・構え・態度・技能・能力を指す概念」⁵⁾である「自己学習力」⁶⁾が意識されたものである。こうした力を重視する向きは古くソクラテスまで遡ってみられるが、これからの変化の激しい時代を生きる上で、不可欠な能力であるといえる。

(2) 「分かる」ということを重視する

クラシック音楽が、あまり馴染みのない人にとっては敷居が高く、コンサートに気軽に行けるものでない原因として、音楽や演奏会に関する知識や楽しみ方が分からないということがあると推察される。

音楽演奏会において、音楽に興味のない聴衆から「楽しかった」「演奏会を聴く機会があると良い」という声は、演奏をした音楽家にとってとても喜ばしいことである。特に「また聴きにきたい」「他の演奏会や曲も聴きたい」という聴衆からの声は、まさに音楽に「興味」をもたせることができた証であろうと考える。生涯学習という視点からも、音楽に対しての興味・関心を抱かなければ、自ら音楽に関わることもなく、音楽演奏会等に行くこともあまりないと考えられる。その点については、「興味は、教育にとって欠くことのできないものです。(中略)なぜなら興味を感じない生徒に教育をすることは不可能だ」⁷⁾という指摘にも表れているといえることができる。

〈1 はじめに〉で述べたように、クラシックの音楽演奏会には独特な雰囲気が漂っていて、一部の愛好家の楽しみという印象がもたれたり、初心者や馴染みの薄い者にとっては敷居の高いものとなっている。このことは、「芸術」と「生活」、「表現」と「鑑賞」、「聴衆」と「演奏者」といった様々な側面に見られる「分離」に原因があると考えられる。木村素衛は「観ることと作ること」は「原理的同一に立たねばなら」ず、「後者は前

者の必然的發展である」と述べている⁸⁾が、これは、鑑賞と表現、あるいは聴衆と演奏者の分離と関係する事柄であると考えられる。また、デューイによれば「山頂は何の支えもなく、宙に浮いているのではない。それは、地上にただ置かれているのでもない。それは際立った作動の一つとしての地球そのものである（傍点は原文ママ）」⁹⁾という。すなわち、芸術を山頂、生活を山のふもとと見なすならば、それらを連続的なものとして捉えない限り、クラシック音楽の演奏者も、聴衆も、クラシック音楽の敷居を高くしていくことになる。クラシック音楽はクラシック音楽という存在なのであって、クラシック音楽の方が人から遠ざかっていくということはない。クラシック音楽を遠くの世界のことだと感じるのは、演奏者や聴衆である我々自身が遠ざかっているからである。しかも、演奏者が遠ざかっていってしまうは、ますます距離が開いてしまう。そこで筆者は、演奏する側がクラシック音楽に対する敷居を下げる努力として、演奏会の内容を理解しやすくするための、ガイド的な資料を聴衆に対して配布することを通して、聴衆が、得た知識を活用して演奏を聴くことができるようにすることを考える。

確かに、「どんな構造になっているか、などということがわかるほど、その音楽が楽しめるなどと言うことは出来ない。それは理解の一助になったと錯覚することであると思ってよい（傍点は原文ママ）」¹⁰⁾という指摘があり、例えば、三部形式が聴き取れたからといって、そのこと自体が音楽を楽しみ、ひいては、音楽を愛好し、豊かな情操や全人的な成長につながるということに関しては、あまり期待できないといえるのかもしれない。

しかし、拍手をしてよいのか好ましくないのかが分からずに不安な状態で演奏と向き合ったり、作曲や演奏の技巧を凝らした作品の聴きどころを知らずに漠然と音に身を委ねつつ睡魔と戦ったりしている状態が、果たして、愛好につながるであろうか。音楽という対象と愛好という態度との間には、言語が深く関係する。人は言語を媒介として、対象である音楽の少なからぬ部分を認識す

る¹¹⁾。その際、愛好と言語による表現の多様さとの因果関係も指摘されている¹²⁾。それらのことを踏まえつつ、生涯学習を念頭に置いたときに、演奏会は誰にでも分かりやすく、開かれたものであることが望ましい。そのためには、楽曲や音楽演奏についての言語による解説が重要であると考ええる。そのことで、聴衆が独りでは知覚できなかったものを知覚でき、そのことと密接な関係にある感受を豊かに行えるようにしたい。そこで、知覚と感受、それらの関連についての様々な面において、活用することができる知識を、配布用プログラム冊子を通して提供することを試みるのである。

なお、今回、本稿で対象とするのは、演奏会の途中で頻繁にアナウンスによる解説を行うことではなく、配布用プログラム冊子の構成に関する工夫である。演奏会の途中のアナウンスには、「トークを交えながら行う演奏は、演奏家にとっては気が散漫になったり声楽の場合は実際には喉への負担もある」といった困難さが伴う¹³⁾。また、音楽演奏のみを求める聴衆には、頻繁なアナウンスは邪魔となるかもしれない。そうした問題とは異なった、静的な種類の工夫を行うことを企図する。

3 配布用プログラムについて

(1) 配布用プログラムの記述量、内容および意義

音楽演奏会において曲目を紹介する場合、司会が聴衆に分かりやすくアナウンスする方法と、配布用プログラムに「曲目解説」を記載する方法とがある。前者（アナウンス）の場合、音楽の知識が豊富でない聴衆にとっては理解しやすく有効な手段であるが、音楽の知識をある程度身に付けている聴衆にとっては、早く次の曲を聴きたい等、音楽に集中したいものである。後者（曲目解説の記載）の場合、音楽の知識が豊富でない聴衆にとっては、演奏を聴きながら「曲目解説」を読んで理解するには、かなり詳しい解説文が必要である。また、知識の豊富な聴衆にとっては、演奏を聴きながら必要に応じて読めば十分であり、逆に聴取の妨げになってしまう可能性がある。

以上のことから、筆者は、配布用プログラムの「曲目解説」の部分、聴衆の知識量に応じて、読み分けができるような体裁の配布用プログラムを作成すべきであるとする。配布用プログラムは、その位置づけが、「コンサートの友」¹⁴⁾であるとされる。つまり、演奏とセットにすることで、コンサートをより良いものにするためのツールであるといえる。

なお、書籍としては、クラシック音楽に親しむための文献は多数出版されている。例えば『CD付き 名曲・名演の違いを探る!! CDでわかるクラシック入門』¹⁵⁾のように、曲目についての解説や演奏上のエピソード等について多面的に豊富な情報の盛り込まれた文献は、知識の豊富でない聴衆にとっても音楽を理解する上で効果的な存在である。本稿では、その文献を、配布用プログラムの作成に際して、例えば、譜例や図の使用方法等に関して参照することとする。

(2) 配布用プログラムづくりに関連した文献

①ウェブ上で確認できる関連論文の数

検索サイト「CiNii Articles」、および、「Google Scholar」において、「『演奏会』『プログラム』『演奏会』『パンフレット』『音楽』『プログラム』『音楽』『パンフレット』」をキーワードにして検索(平成30年1月14日8:36-11:45)したところ、該当する論文を管見の限りでは見つけることができなかった。

②演奏会づくりに関する文献における記述

本稿において、演奏会をつくる上で参照する『クラシック・コンサート制作の基礎知識』(前掲³⁾参照)および、演奏会の運営について書かれたいくつかの文献¹⁶⁾には、配布用プログラムの内容やデザイン等に関する記述を見つけることはできなかった。

(3) 配布用プログラムの位置づけ

〈本節／(1)〉で触れたように、演奏とセットにすることでコンサートをより良くすることが意義

として考えられるが、『クラシック・コンサート制作の基礎知識』(前掲³⁾参照)では、広報費として分類されており、宣伝としての役割もあると考えられる。

(4) プログラムの体裁

①プログラムの例

配布用プログラムには、主に次の項目が記載されている。

- ・主催者の挨拶文
- ・演奏者のプロフィール
- ・演奏する楽曲の順番
- ・曲目解説
- ・歌詞や訳詞
- ・広告協賛

配布用プログラムには、これらすべての項目を記載したもの、または、これらの項目の一部が掲載されたものや、演奏する楽曲の順番のみが記載されたものが一般的な配布用プログラムである。

②引用元の記載が見られない曲目解説

配布用プログラムの曲目解説には、曲目解説を作成する際に使用した、引用元や参考資料等が明記されていることはまれである。例えば、筆者(山内)のもつ、曲目解説が書かれている演奏会の配布用プログラム86冊のうち、22冊が引用ではなく曲目解説を書いた人の名前が記載されたもの、63冊はその表示もなく、1冊のみが引用元・参考資料等を明記したもの(CDの解説をそのまま掲出したもの)であった。紙面のスペースに限りがあることが理由であろうか、あるいは、演奏に取り組む者は、指導者からの指導や文献等から学んだことを消化したものを演奏によって表現するという習慣であり、引用元を表示する文化をもたないことが原因であろうか。

4 配布用プログラムの作成と改善

(1) 配布用プログラムの内容

〈3／(4)／①〉で述べた、主催者の挨拶文、演

奏する楽曲の順番、演奏者のプロフィール、曲目解説、歌詞や訳詞、広告協賛等が記載されている、一般的な配布用プログラムを参考にして、内容を決定する。

①演奏者紹介（演奏者の写真、氏名、担当楽器）

演奏者の紹介として、演奏者の写真、氏名、担当楽器を掲出する。

②曲目解説（曲名、解説、楽典等の基礎知識や関連する事項、面白味のある豆知識）

演奏される楽曲について様々な情報を掲出する。

③参考資料

曲目解説の作成にあたり、参考及び引用した文献・ウェブサイトの情報を掲出する。

④プログラムデザイン

配布用プログラムの体裁、例えば、折り方（観音開き、二つ折り等）や配色、記載内容のレイアウト等について、特にクラシック音楽にあまり親

しみのない聴衆にも、親しみやすくするものにすることを意図してデザインする。

以上の内容を踏まえ、今回の実践では、それに加えて、一曲ごとに「作曲者についての説明」「作曲者の他の作品」「図や譜例を用いて楽曲を理解できるようなポイント」「参考資料」、オペラについては「あらすじ」等を掲載する。

また、上述の項目を記載した配布用プログラムである「研究プログラム」と演奏する楽曲の順番、演奏者のプロフィール、曲目解説のみを記載した一般的な配布用プログラムである「通常プログラム」の二種類の配布用プログラムを作成する。

(2) プログラムの作成と試行

①配布用プログラムづくりの実践

【図1】は、〈4／(1)〉を踏まえて作成し、演奏会において配布した、11ページにおよぶ「研究

【第1幕】従者レボレツロを引き連れ、夜な夜な女性の家へ忍び込み、種々の色目ドフン・ジョヴァンニ。今宵は婚約者ドフン・オッターガイオに、犯人を探して復讐してほしいと求める。

ジョヴァンニは通りすがりの女性に声をかけるが、それは昔の女ドフン・エルガイオ。彼女はジョヴァンニに捨てられてもまだ彼を愛し、彼を探していたのだ。ジョヴァンニは大慌てで逃げる。後を証されたレボレツロは彼女に、ジョヴァンニはヨーロッパじゅうの2000人もの女性と関係しているのだから諦めるよう諭す。

村で農民マゼットと村娘ツェルリナーの結婚式が始まろうというとき、ジョヴァンニが来て花嫁を誘惑するが、すんでのところでエルガイオが止める。アツナは犯人探しをジョヴァンニに求めるが、話すうち彼こそ犯人だと気づく。村人たちが招いてパーティーを開くジョヴァンニは上機嫌、そんな彼をアツナたちは追及する。

【第2幕】ジョヴァンニはレボレツロと服を交換して変装し、エルガイオの小間使いを誘惑、マゼットと農民たちはジョヴァンニを殺そうとやってくるが、ジョヴァンニはレボレツロに計画を話し、逆にとつちめられる。ジョヴァンニの服を着たレボレツロは命から懸けてきて、ジョヴァンニと落ち合う。すると、騎士長の墓の石像が、成めの音楽を奏り出す。驚く2人だが、ジョヴァンニは離せず騎士長を喚びに招待する。夜、ジョヴァンニの家に本当に騎士長がやってきた。騎士長はジョヴァンニに懐いて改めるよう迫るが、ジョヴァンニは拒否。騎士長はジョヴァンニの手を取って炎の中へ引きずり込み、ジョヴァンニは地獄へと落ちるのだった。

【曲目】

- ・クローエに An Chloé
- ・歌劇「ドフン・ジョヴァンニ」より
- ・彼女こそわたしの宝 Dalla sua pace la mia dipende

【作曲者】

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart

1756年1月27日、ザルツブルグに生まれる。オーストリアの作曲家で、古典派音楽の代表であり、ハイドゥン、ヘイドゥン、ベートーヴェンと並んでウィーン古典派3大巨匠の1人である。モーツァルトは、わずか3歳のときに聴いたばかりの音楽をすぐさまピアノで弾きこなしたり、5歳でマスエツトやコンチェルトを作曲したことなどから「神童」と呼ばれていた。

【演奏者】

テノール
山内 芳春

ピアノ
遊佐 竜弥





【曲目解説】

「クローエに An Chloé」
劇的な曲調によって書かれている歌曲です。「原語は13節構成だがモーツァルトは4節だけを取り出し、副歌のない、明るい音楽に転化した。また、この歌曲は「器楽的なソング形式」で編曲されている。

【彼女こそ私の宝 Dalla sua pace】
このアリアは、オペラ「ドフン・ジョヴァンニ」の第1幕第14場でドフン・アツナ（Sopr.）の婚約者、ドフン・オッターガイオ（Ten.）の歌うもので「私の幸福も苦しみも、すべて彼女の仕合わせと苦しみにかかっている」といったような歌である。この役割はオペラでは影が薄いのが、劇中は美しいものとなっている。

【参考資料】

- ・海老澤敏/吉田泰輔「モーツァルト事典」東京書籍、1992年再刷
- ・堀内久美雄「最新・オペラ名作アリア選集 テノール1」音楽之友社、2013年第13刷
- ・「新国立劇場 オペラ・ドフン・ジョヴァンニ」
http://www.nnt.jac.go.jp/opera/perfor
mance/9_003716.html [平成29年9月11日13時54分閲覧]

【図1】 配布用プログラム「研究プログラム」（第1版）

281

プログラム」の一部である。

②演奏会の概要

名称：北翔大学芸術メディア学科音楽コース第14

期卒業生有志によるジョイントコンサート

日時・場所：平成29年9月16日（土）旭川市神楽

公民館 木楽輪

出演者：山内芳春（テノール・トロンボーン），
手島 里佳子（ホルン），早川実花（サクソフォーン），
遊佐竜弥（ピアノ），千葉圭説（監修）

③聴衆へのアンケート（アンケートの内容，アンケート結果，回答数17名）

[表1-1]「このようなプログラムはあったほうがよいですか？ ないほうがよいと思いますか？」という問いに対する回答結果

あったほうがよい	←	どちらともいえない	→	ないほうがよい
7名	8名	2名	0名	0名

[表1-2]「プログラムのどの項目に関心がありましたか？」との設問に対する回答結果（複数回答可）

演奏者の情報	作曲家についての説明	聴いておきたい名曲	図や譜例	楽曲のポイント	オペラのあらすじ	曲目解説	参考資料
4名	8名	5名	5名	9名	6名	10名	2名

○その他ご自由にお書きください（自由記述。原文ママ。下線は筆者）

- ・ 文量が多く、演奏会中に読みきることが難しいです。読み切ろうとすると演奏に集中できません。
- ・ 初心者も大変親切な冊子になっている。

[表1-3]「このようなプログラムはあったほうがクラシックの演奏会に親しみやすくなると思いますか？」との設問に対する回答結果

思う	どちらともいえない			思わない
← 5	4	3	2	1 →
8名	7名	2名	0名	0名

[表1-4]「本日の演奏会では、2種類のプログラムを配布しましたが、あなたにとってどちらのプログラムが好ましいと思いますか？」との設問に対する回答結果

通常プログラム	研究プログラム	両方	無回答
4名	10名	1名	2名

○研究プログラムについてお気づきの点がございましたらご記入ください。（自由記述。原文ママ。下線は筆者）

- ・ 初心者も大変親切な冊子になっている。
- ・ わかりやすいプログラムでとても良かったです。
- ・ 曲を知る上で参考になり深く聴くことができ、良いと思います。
- ・ この様なプログラムをコンサートで貰って見るのは、初めてなので、まず内容をはあくするのに時間がかかると思いました。私し個人的には良いプログラムと思いましたが、あまり一般的でない様に感じました（理由 開演前30分余では解読できないと思いました）

④アンケート結果の検討

- ・ 設問「このようなプログラムはあったほうがよいですか？ ないほうがよいと思いますか？」について、このような配布用プログラム「あったほうがよい」と回答した割合の合計が88.2%（15名）であった（[表1-1] 参照）。このことから、配布用プログラムは、一定のニーズがあると考えられる。
- ・ 設問「プログラムのどの項目に関心がありましたか？」について、「作曲家についての説明」「楽曲のポイント」「曲目解説」が上位の三項目であった（[表1-2] 参照）。このことから、聴衆にとって比較的関心の高い項目は、これらの三点であると考えられる。
- ・ 設問「このようなプログラムはあったほうがクラシックの演奏会に親しみやすくなると思いますか？」について、回答結果の平均値は4.35であった（[表1-3] 参照）。このことから、配布用プログラムがある方が、音楽に親しみやす

くなることが推察できる。

- ・設問「本日の演奏会では、2種類のプログラムを配布しましたが、あなたにとってどちらのプログラムが好ましいと思いますか？」について、58.8%が「研究プログラム」のほうが自らに好ましいと回答した([表1-4]参照)。また、「研究プログラム」が好ましいとの回答のうち4名が音楽経験あり、5名が音楽経験なし、1名が音楽経験不明の聴衆であった。「通常プログラム」が好ましいとの回答のうち2名が音楽経験あり、2名が音楽経験なしの聴衆であった。このことから、音楽経験や知識の量に限らず、「研究プログラム」のような配布用プログラムは、一定のニーズがあると考えられることができる。
- ・自由記述においては、「研究プログラム」について記入者4名中3名が「初心者も大変親切な冊子になっている。」「わかりやすいプログラムでとても良かったです。」というような肯定的な意見であった。一方、記入者4名中1名が「こ

様なプログラムをコンサートで貰って見るのは、初めてなので、まず内容をはあくするのに時間がかかると感じました」と否定的な意見であったが、それは、従来と異なる形の配布用プログラムへの戸惑いであることも考えられる。また、「分量が多く、演奏会中に読みきることが難しいです。読み切ろうとすると演奏に集中できません」という回答もあり、説明文の字数が多く全て読むのに困難さがあることも見て取れる。

(3) 配布用プログラムの改善—その1

① 配布用プログラム内容

〈4/2/④〉の考察を踏まえ、全体的に文字数を減ずることにした。その際、「演奏者の情報」を削除した。また、音楽の知識が豊富な聴衆は上部の曲目解説のみを、音楽の知識が豊富でない聴衆には、仕切りより下の部分も読むことを促すようデザインした ([図2] 参照)。

〈曲目〉
ライネ・クライネ・ナハトムジーク
EINE KLEINE NACHTMUSIK

〈作曲者〉
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart

〈曲目解説〉
本作はモーツァルトの楽曲の中でも非常に有名な曲のひとつです。
この曲の「ライネ・クライネ・ナハトムジーク」という題は、ドイツ語でEineは女性形の不定冠詞、kleineは「小さな」の意の形容詞、kleinの女性形、Nachtmusikは、Nacht(夜)+Musik(音楽)の合成名詞で、「小さな夜の曲」という意味です。かつて日本語では「小夜曲」と訳されていたが、今ではほとんど使われなくなっています。この題名はモーツァルト自身が自作の目録に書き付けたものであります。

—— この楽曲について、もっと詳しく知りたい方は、これより下をご覧ください。 ——


1756年1月27日、ザルツブルグに生まれる。オーストリアの作曲家で、古典派音楽の代表であり、ハイドン、ベートヴェンと並んでウィーン古典派3大巨匠のひとつです。モーツァルトは、わずか3歳のときに聴いたばかりの音楽をすべさまピアノで弾きこなし、5歳でメヌエットやコンチェルトを作曲したことなどから「神童」と呼ばれていました。

〈楽曲のポイント〉
この楽曲は、ヴァイオリン1と2、ヴィオラ、チェロのパートがそれぞれ、メロディー、リズム、ハーモニー(ハモリ)、演奏を担当しています。


ヴァイオリン1	メロディー	メロディー	メロディー
ヴァイオリン2	メロディー	こまかいリズム	ハーモニー・こまかいリズム
ヴィオラ	メロディー	ほんそう	ほんそう・ハーモニー
チェロ	メロディー	ほんそう	ほんそう

スタート → → → → → → → → → →

木田はじりて



派3大巨匠のひとつです。モーツァルトは、わずか3歳のときに聴いたばかりの音楽をすべさまピアノで弾きこなし、5歳でメヌエットやコンチェルトを作曲したことなどから「神童」と呼ばれていました。



モーツァルト一家(左から、モーツァルト、母(作中)、父)

〈聴いておきたい名曲〉

- ・ピアノソナタ イ長調 K.331 (第3楽章のトルコ行進曲が特に有名)
- ・歌劇「フィガロの結婚」(生き生きとした人物描写のうまさに注目)

〈参考資料〉

- ・神を讃歌/吉田泰輔『モーツァルト事典』東京音楽、1992年再刷
- ・千歳八郎『音楽史(作曲家とその作品)』教育芸術社、1983年
- ・W.A.モーツァルト『オインツブルク・スコプ・ライネ・クライネ・ナハトムジーク』全音楽譜出版社

【図2】 配布用プログラム「研究プログラム」(第2版)

②演奏会の概要

名称：第52回上川管内教育研究会南部地区研究大会 音楽班研修「道北おとほけキャラバン～楽しい音楽教育コンサート～」

日時・場所：平成29年10月6日（金）南富良野町立南富良野中学校

出演者：早川元啓（ヴァイオリン）、芳賀均（ピアノ）

③聴衆へのアンケート（アンケートの内容、アンケート結果、回答数14名）

〔表2-1〕「このようなプログラムはあったほうがよいですか？ ないほうがよいと思いますか？」との設問に対する回答結果

あったほうがよい	←	どちらともいえない	→	ないほうがよい
4名	9名	1名	0名	0名

〔表2-2〕「プログラムのどの項目に関心がありましたか？」との設問に対する回答結果（複数回答可）

曲目解説	作曲者についての説明	楽曲のポイント	聴いておきたい名曲	参考資料
11名	7名	7名	3名	4名

○その他ご自由にお書きください。

（記述なし）

〔表2-3〕「このようなプログラムはあったほうがクラシックの演奏会に親しみやすくなると思いますか？」との設問に対する回答結果

思う	どちらともいえない			思わない
← 5	4	3	2	1 →
8名	6名	0名	0名	0名

○プログラムについてお気づきの点がございましたらご記入ください。（自由記述。原文ママ。下線は筆者）

- ・「もっと詳しく知りたい方は～」の書き方が、読みやすくて良い。（自分で選べる、興味を引く）文章量はなるべく少ない方が、読みやすいと思

います。

- ・少しだけ字が細かいかもしれないので、ポイントとなる言葉を大きくするなどしたら、よりよいと思います。
- ・良いと思いましたが、ページがかさみ、お金もかかるかと…。
- ・子ども向けだとしたら、多少内容が難しいと思いました。

○このプログラムについて教師の立場から、子どもたちにとってどんな意義があると考えますか。（自由記述。原文ママ。下線は筆者）

- ・小さい子どもでも楽しみながらクラシックに触れるきっかけとなる。
- ・教科書でやった内容+αの内容なので、子どもたちへの印象がより強くなると思います。
- ・解説があると曲のふん囲気などもつかみやすくなり、聞き方もかわってきて、親しみやすくなると思います。
- ・ただきくよりも、よくわかる（興味をもってもらえる）きっかけづくりになると思います。
- ・このプログラムは、大人、子ども関係なく、使えると思います。大変有意義でした。

④アンケート結果の検討

- ・設問「このようなプログラムはあったほうがよいですか？ ないほうがよいと思いますか？」について、このような配布用プログラム「あったほうがよい」と回答した割合の合計が71.4%（10名）であった（〔表2-1〕参照）。このことから、配布用プログラムは、一定のニーズがあると考えられる。
- ・設問「プログラムのどの項目に関心がありましたか？」について、「曲目解説」「作曲者についての説明」「楽曲のポイント」が上位の三項目であった（〔表2-2〕参照）。このことから、聴衆にとって比較的関心の高い項目は、これらの三点であると考えられる。このことは前項（第3節(2)）におけるアンケート結果と同様であった。
- ・設問「このようなプログラムはあったほうがク

ラシックの演奏会に親しみやすくなると思いませんか?」について、回答結果の平均値は4.57であった〔表2-3〕参照)。このことから、配布用プログラムがある方が、音楽に親しみやすくなるのが推察できる。

- ・自由記述において、「『もっと詳しく知りたい方は〜』の書き方が、読みやすく良い。(自分で選べる,興味を引く)」という回答があった。このことから、前項〈4/(2)〉を踏まえた改善の効果であると考えられ、聴衆が身につけている知識に応じて読み分ける体裁は効果的であることが見て取れる。

一方、「文章量はなるべく少ない方が、読みやすいと思います。」「少しだけ字が細かいかもしれないので、ポイントとなる言葉を大きくするなどしたら、よりよいと思います。」といった否定的な回答もあった。このことから、説明文の字数については、前項〈4/(2)/④〉同様に多すぎず、また、ポイントとなる言葉を大きくする等の工夫

が必要であるといえよう。

- ・今回の実践は、教育研究会で行ったため聴衆は現職教員であった。そこでアンケートに、設問「このプログラムについて教師の立場から、子どもたちにとってどんな意義があると考えますか。(自由記述)」を設けた。その結果、「小さい子どもでも楽しみながらクラシックに触れるきっかけとなる。」「教科書でやった内容+αの内容なので、子どもたちへの印象がより強くなると思います。」といった回答が得られた。このことから、学校教育の場を想定した場合も、こうした配布用プログラムが有効なのではないかと考える。

(4) 配布用プログラムの改善—その2

① 配布用プログラム内容

内容や改善点については〈4/(3)〉と同様であるが、コンサートの対象に小学生が多数含まれていたため漢字にふりがなをつけた〔図3〕参照)。

《楽いておきたい名曲》

- ・ピアノソナタ イ長調 K.331 (第3楽章のトルコ行進曲が特に有名)
- ・歌劇「アイガロの結婚」(生き生きとした人物描写のうまさに注目)

《参考資料》

・海老原俊一/吉田泰輔『モーツァルト事典』東京音楽社、1992年刊
 ・千原由美『音楽史(作曲家とその作品)』教館社、1983年
 ・W.A.モーツァルト『アイゲンツァルグ・スコア・アイナネ・クラインネ・ナハトムジーク』全音楽譜出版社

《曲目》

アイネネ・クラインネ・ナハトムジーク
 EINE KLEINE NACHTMUSIK
 Wolfgang Amadeus Mozart

《作曲者》

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

《曲目解説》

モーツァルトの楽典の中でも非常に有名な曲のひとつです。この曲の「アイネネ・クラインネ・ナハトムジーク」という題は、ドイツ語でEINEは女性形の不定冠詞、kleineは「小さな」の意の形容詞、Kleinの女性形、Nachtmusikは、Nacht(夜)+Musik(音楽)の合成名詞で、「小さな夜の曲」という意味です。かつて日本語では「小夜曲」と誤られていたが、今ではほとんど使われなくなっています。この題名はモーツァルト自身が自作の目録に書き付けたものであります。

—— この楽曲について、もっと詳しく知りたい方は、これより下をご覧ください。 ——

1756年1月27日、ザルツブルグに生まれる。オーストリアの作曲家で、古典派音楽の代表であり、ハイドン、ベートーヴェンと並んでクラシック音楽の派3大巨匠のひとりです。モーツァルトは、わずか3歳のときに聴いたばかりの音楽をすぐさまピアノで弾きこなしたり、5歳でメソッドやコンチエルトを作曲したことなどから「神童」と呼ばれていました。

《楽曲のポイント》

この楽曲は、ヴァイオリン1と2、ヴァイオリン、チェロのパートがそれぞれ、メロディー、リズム、ハーモニー(ハモリ)、伴奏を担当しています。

パート	楽器
ヴァイオリン1	メロディー
ヴァイオリン2	メロディー
ヴァイオリン	メロディー
チェロ	メロディー
スタート	メロディー

《曲の構成》

1. 序奏 (メロディー)



2. 第一楽章 (メロディー)

3. 第二楽章 (メロディー)

4. 第三楽章 (メロディー)

5. 終曲 (メロディー)

6. 終曲 (メロディー)

【図3】 配布用プログラム「研究プログラム」(第3版)

②演奏会の概要

名称：道北おとぼけキャラバン「楽しい音楽教育コンサート」音楽ものしり面白コンサート

日時・場所：平成29年10月7日（土）北見市緑ヶ丘遊子児童館

出演者：芳賀均（ピアノ）、早川元啓（ヴァイオリン）、山内芳春（テノール・トロンボーン）、吉田風実佳（ピアノ・クラリネット）、大野紗依（ピアノ・ホルン）

③聴衆へのアンケート（アンケートの内容、アンケート結果、回答数15名）

〔表3-1〕「このようなプログラムはあったほうがよいですか？ ないほうがよいと思いますか？」との設問に対する回答結果

あったほうがよい	←	どちらともいえない	→	ないほうがよい
8名	3名	4名	0名	0名

〔表3-2〕「プログラムのどの項目に関心がありましたか？」との設問に対する回答結果（複数回答可）

曲目解説	作曲者についての説明	楽曲のポイント	聴いておきたい名曲	参考資料
7名	5名	8名	3名	1名

○その他ご自由にお書きください。

（記述なし）

〔表3-3〕「このようなプログラムはあったほうがクラシックの演奏会に親しみやすくなると思いますか？」との設問に対する回答結果

思う	どちらともいえない			思わない
← 5	4	3	2	1 →
8名	5名	2名	0名	0名

○おくばりしたプログラムについてお気づきの点がございましたらご記入ください。（自由記述。原文ママ）

- ・勉強になりました。
- ・大人向けプログラムと子ども向けプログラム両

方あった方がよいとおもいました。

- ・ちょっと難しかったような気がします。それよりは、本当に内容があらかた、書いてあったりしたプログラムの方が、記憶にのこる気がします。
- ・音楽の授業のプリントのようなかんじだったので、これならない方が親しみがわくと思います。

④アンケート結果の検討

- ・設問「このようなプログラムはあったほうがよいですか？ ないほうがよいと思いますか？」について、このような配布用プログラム「あったほうがよい」と回答した割合の合計が73.3%（11名）であった（〔表3-1〕参照）。このことから、配布用プログラムは、一定のニーズがあると考えられる。
- ・「プログラムのどの項目に関心がありましたか？」について、「曲目解説」「楽曲のポイント」「作曲者についての説明」が上位の三項目であった（〔表3-2〕参照）。このことから、聴衆にとって比較的関心の高い項目は、これらの三点であると考えられる。このことは前項および前々項〈4/(2)/③〉〈4/(3)/③〉におけるアンケート結果と同様であった。
- ・設問「このようなプログラムはあったほうがクラシックの演奏会に親しみやすくなると思いますか？」について、回答結果の平均値は4.4であった（〔表3-3〕参照）。このことから、配布用プログラムがある方が、音楽に親しみやすくなることが推察できる。
- ・自由記述において、「大人向けプログラムと子ども向けプログラム両方あった方がよいとおもいました。」という回答があった。このことから、聴衆が身につけている知識に応じたものだけではなく、年齢に応じた配布用プログラムも求めているといえよう。一方、「音楽の授業のプリントのようなかんじだったので、これならない方が親しみがわくと思います」という回答もあった。学校の授業のように音楽の勉強をするかのような印象をもったということが推察でき

る。演奏会では、知識と距離を置いて音楽に身を委ねる形で音楽を楽しみたいという気持ちを見て取れるが、同時に、決して学校の音楽の授業が楽しいものではないという印象の表れであると考えることができる。

(5) 配布用プログラムの改善—その3

①プログラム内容

〈4/4〉〈4/5〉の考察を踏まえ、文字の細かさを克服するため、説明文の字数をさらに減じ、文字を大きくした。さらに、ポイントとなる言葉や譜例が目立つよう工夫した。なお、この実践では、聴衆が高齢者であることが事前に把握できていたため、文字をさらに大きくした。また、解説の内容も聴衆が高齢者ということを考慮して作成した昭和当時に流行した事等を取り上げるといふ記述をして作成した（【図4】参照）。

②演奏会の概要

名称：～学園生の心に刻む懐かしのメロディー～

29「聚楽学園」音楽の宝箱をそっと開いて

日時・場所：平成29年11月16日（木）江別市民文化ホール（えぼあホール）

出演者：千葉圭説（指揮）、北翔大学教育文化学部教育学科音楽コース学生（吹奏楽）

③聴衆へのアンケート（アンケートの内容、アンケート結果、回答数149名）

[表4-1]「このようなプログラムはあったほうがよいですか？ ないほうがよいと思いますか？」との設問に対する回答結果

あったほうがよい	←	どちらともいえない	→	ないほうがよい
85名	45名	5名	0名	0名

この楽曲について、もっと詳しく知りたい方は、これより下をご覧ください。

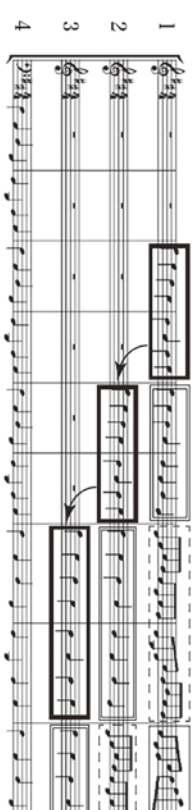
この楽曲は、バッハの『カンツォネッタ』の第2楽章。この曲は、バッハの『カンツォネッタ』の名で広く知られており、バッハの作品のなかでも最も有名であり、一般に知られている唯一の作品です。しばしば、クラシック音楽の入門曲として取り上げられています。また、ポピュラー音楽において引用されることも多い。卒業式や結婚式、離任式のBGMとして使われることもあります。リナチイ製絃楽器のお湯はりが完了したことを知らせるメロディに採用されています。

作曲者
ヨハン・バハ
Johann Bach

この楽曲について、もっと詳しく知りたい方は、これより下をご覧ください。

バロック期（ヨーロッパにおける17世紀初頭から18世紀半ば）のドイツの作曲家です。南ドイツ・オルガン奏派の最盛期を支えたオルガン奏者で、教師でもありました。宗教曲・非宗教曲を問わず多くの楽曲を作曲、コラール前奏曲やフーガの発展に大きく貢献したことから、バロック中期における最も重要な作曲家の一人に数えられています。

楽曲のポイント
カンツォネッタは、複数の声部（パート）が同じ旋律を異なる時点からそれぞれ開始して演奏する様式の楽曲です。一般に輪唱と訳され、「カエルのうた」はカンツォネッタ（輪唱）となっている楽曲のひとつです。



譜例はカンツォネッタの第1声部、第2声部、第3声部へと順々に受け渡されています。□の旋律がそれぞれ2小節ずれながら他の声部へ受け継がれていく様子がわかります。

聴いておきたい名曲

- 「音楽の楽しみ」2つのヴァイオリンと通奏低音のための6つのパルティエー
- 5本の弦と通奏低音のためのパルティエー

参考文献

- 千歳八郎『音楽史（作曲家とその作品）』教養出版社、1983年
- 『YAMAHA 楽器解体全書 音楽人物辞典・ヨハン・バハ』
- http://www.yamaha.co.jp/plus/person/7in_jaskid=76 [平成29年11月5日9時43分閲覧]
- 「ヨハン・バハ」Wikipedia
- https://ja.wikipedia.org/wiki/ヨハン・バハ

【図4】 配布用プログラム「研究プログラム」（第4版）

[表4-2] 「プログラムのどの項目に関心がありましたか？」との設問に対する回答結果（複数回答可）

曲目解説	作曲者についての説明	楽曲のポイント	聴いておきたい名曲	参考資料
110名	79名	69名	43名	20名

○その他ご自由にお書きください。（自由記述）

原文ママ。下線は筆者）

- ・あった方がより楽しめるのは解りますが年令的には音楽を聞いて自分なりの世界で楽しんでいます。
- ・わかりやすく解説してもらっており聴く時の参考になりました。
- ・プログラムの説明（カノン）の事を聞いて音楽を聞くと、興味をもってきけた。
- ・楽曲のポイントだけ曲紹介時に少し話すだけで良いと思います。
- ・参考文献の記載がありよかったです。

[表4-3] 「このようなプログラムはあったほうがクラシックの演奏会に親しみやすくなると思いますか？」との設問に対する回答結果

思う	どちらとも いえない			思わない
← 5	4	3	2	1 →
94名	28名	5名	1名	0名

○おくばりしたプログラムについてお気づきの点がございましたらご記入ください。（自由記述）

原文ママ。下線は筆者）

- ・予備知識を知る上でもとても良いものと思います。
- ・少し知りたい、ちょっと知ったつもりで専門的な事は必要ないと思います。（楽曲、楽譜等）

④アンケート結果の検討

- ・設問「このようなプログラムはあったほうがよいですか？ ないほうがよいと思いますか？」について、このような配布用プログラム「ぜひあったほうがよい」と「あったほうがよい」と回答した割合の合計が87.2%（130名）であった

（[表4-1] 参照）。このことから、配布用プログラムは、一定のニーズがあると考えられる。

- ・設問「プログラムのどの項目に関心がありましたか？」について、「曲目解説」「作曲者についての説明」「楽曲のポイント」が上位の三項目であった（[表4-2] 参照）。このことから、聴衆にとって比較的関心の高い項目は、これらの三点であると思われる。これは、前項以前の〈4/(2)~(4)〉におけるアンケート結果と同様であった。
- ・設問「このようなプログラムはあったほうがクラシックの演奏会に親しみやすくなると思いますか？」について、回答結果の平均値は4.02であった（[表4-3] 参照）。このことから、配布用プログラムがある方が、音楽に親しみやすくなる考えられる。
- ・自由記述（主に下線を付した部分）において、「わかりやすく解説してもらっており聴く時の参考になりました」「プログラムの説明（カノン）の事を聞いて音楽を聞くと、興味をもってきけた」「予備知識を知る上でもとても良いものと思います」という肯定的な回答があった。このことから、聴衆が、配布用プログラムから得た知識を活用して演奏を聴いていることが見て取れる。一方、「あった方がより楽しめるのは解りますが年令的には音楽を聞いて自分なりの世界で楽しんでいます」「少し知りたい、ちょっと知ったつもりで専門的な事は必要ないと思います。（楽曲、楽譜等）」といった否定的な回答があった。このことから、音楽と知識とを関連させるよりも、知識と距離を置いて音楽に身を委ねる形で純粹に音楽を楽しみたいという立場もあるということができよう。

5 本稿のまとめ

前節〈4/(2)~(5)〉までを踏まえ、演奏会における配布用プログラム冊子の構成の工夫について考察する。

一つ目に、配布用プログラムについて〈4/(2)

～(5)における「ぜひあったほうがよい」と「あったほうがよい」という回答の割合の合計がそれぞれ(2)では88.2% (17名中15名), (3)では71.4% (14名中10名), (4)では73.3% (15名中11名), (5)では87.2% (149名中130名)であったことから、配布用プログラムには、一定のニーズがあると考えられる。演奏会において配布することには啓発する意味があるといえる。

二つ目に、このようなプログラムはあったほうがクラシックの演奏会に親しみやすくなるかを問うた〈4/(2)～(5)〉の設問に対する回答の平均値がそれぞれ、(2)では4.35, (3)では4.57, (4)では4.4, (5)では4.02であった。このことから、配布用プログラムがある方が、音楽に親しみやすくなると考えられる。

三つ目に、プログラムのどの項目に関心があったかを問うた〈4/(2)～(5)〉の設問に対する回答として上位三項目を、「曲目解説」「作曲者についての説明」「楽曲のポイント」が占めた。このことから、聴衆にとって比較的関心の高い項目は、これらの三点であると考えられる。平成の時代になって以降、音楽授業で行われる音楽鑑賞において、「作曲者についての説明」があまり扱われなくなった傾向が指摘¹⁷⁾されるが、本研究における調査の結果から、聴衆の関心事であることが見て取れることから、意識的に扱うことが重要であると考えられる。

本研究では、対象の異なる状況において調査を行ったが、それらに共通して「曲目解説」「作曲者についての説明」「楽曲のポイント」の三項目が、聴衆にとって関心が高いこと、さらに、このような配布用プログラムを見て演奏を聴くとクラシック音楽に対する興味が持てるということが見いだされた。

また、本研究で作成したような、配布用プログラムは、普及されていないため、若干の戸惑いがある聴衆はいるものの、〈4/(5)／③〉の自由記述「わかりやすく解説してもらっており聴く時の参考になりました」といった回答から見て取れるように、〈2/(2)〉で述べたように、本研究で作

成した配布用プログラムは、「演奏会の内容を理解しやすくするためのガイド的な資料」として、聴衆が、得た知識を活用して演奏を聴くことができ、クラシック音楽に対する敷居を下げる効果があると考えられる。また、〈4/(5)／③〉の自由記述「プログラムの説明(カノン)の事を聞いて音楽を聞くと、興味をもってきけた」という回答からは、既述の、聴衆が得た知識を活用して演奏を聴くことができるようになることと併せて、〈2/(2)〉で述べたように、音楽に対しての興味・関心を抱かせることができると考えられる。このことが生涯学習へとつながっていく可能性があると考えられる。

本研究で見いだされたことは、学校における音楽鑑賞の授業に生かしていくことができると考える。本研究の対象にした聴衆と、学校の音楽授業を受ける児童・生徒とでは、その場にいる人の中でも興味・関心に濃淡のある点で、共通であると考えられ、それらに対し、あまねく働きかけ、複数の観点から生涯学習につながる興味・関心の喚起につなげることができると考えられるからである。学校の授業に使用する音楽鑑賞の活動に向けた教材の構成や改善を、今後の課題とする。

註

- 1) 西島央「誰がクラシックコンサートに行くのか—東京・新潟・鹿児島コンサート会場におけるアンケート調査をもとに—」『東京大学大学院教育学研究科紀要第43巻』東京大学, 2003.参照。コンサート会場参集者に対して実施したアンケート調査から、聴衆は都市部に住む高年齢で高階層出身かつ高学歴者の「常連」中心に構成されていることが明らかになった。「常連」は高年齢層、高学歴で、文化的環境に恵まれた高い階層であり、音楽学習経験も豊かで、クラシック音楽に対して親和的である。これらのことから、クラシックコンサートが階層文化としてある階層に閉じられたものになっていく可能性があるとしている。
- 2) 『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について』第14期中央教育審議会答申, 1991.
- 3) 社団法人 日本クラシック音楽事業協会『クラシック・コンサート制作の基礎知識』ヤマハミュージックメディア, 2013, p.95.参照。配布用プログラムの説明

- として、「公演当日に販売、または配布するのが公演プログラムである」という記述が見られる。
- 4) 赤尾勝己『生涯学習概論—学習社会の構想—』関西大学出版部、平成10年。
 - 5) 山崎英則・片上宗二編『教育用語辞典』ミネルヴァ書房、2003、p.219。
 - 6) 「学習者が自己形成に向けて自ら進んで学び、自らの努力で自己を高めていく主体的な資質・能力を育む総合的な生きる力」(今野喜清・新井郁男・児島邦宏編『新版 学校教育辞典』教育出版、2003、p.346.)である「自己教育力」を学習者の視点で捉えたものということもできる。
 - 7) ジェームズ・L・マーセル著／美田節子訳『音楽教育と人間形成』音楽之友社、昭和42年、p.282。
 - 8) 木村素衛「美のかたち」(昭和16年)『美のプラクシス』燈影舎、2000、p.121.参照。
 - 9) デューイ著／河村望訳『経験としての芸術』人間の科学社、2003、pp.9-10。
 - 10) 湯浅譲二『人生の半ば 音楽の開かれた地平へ』慶應義塾大学出版会、1999、p.187。
 - 11) 言葉で表わせないものを表現できることが音楽の特徴である。しかし、言葉で表現できる部分もまた重要である。言葉は自己の内面に根付いたものである。「語る—了解する」という関係があって、諸観念の世界が言語のなかに進入し、逆に言語は諸観念に進入するように、思考や認識にとって重要な存在である(M.メルロ=ポンティ著、中島盛夫監訳『見えるものと見えざるもの』法政大学出版局、1994、p.310およびp.368.を参考にした)。
 - 12) 新原将義・有元典文「音楽知覚の分化に関する一研究—ヘビーメタル・ミュージックを主題として—」『教育相談・支援総合センター研究論集』第10号、横浜国立大学大学院教育学研究科、2010。
 - 13) 持松朋世「アウトリーチ活動に関連した音楽教育の可能性についての一考察」『活水論文集 音楽学部編』58、活水女子大学、2015、pp.69-70。
 - 14) 前掲書³⁾、p.96。
 - 15) 広上淳一監修『CD付き 名曲・名演の違いを探る!! CDでわかるクラシック入門』ナツメ社、2011。
 - 16) 演奏会の運営に関する内容が記載された文献には以下のようなものがある。合唱の基本知識や発声法、練習方法、演奏会の運営等の内容を扱っており、学生から大人の合唱団まで幅広く対応した内容のもの(清水敬一『必ず役に立つ 合唱の本』ヤマハミュージックメディア、2013)。5名の吹奏楽指導者の練習方法や基本の流れを紹介しており、吹奏楽部の指導法や運営法等、指導者向けに書かれているもの(丸谷明夫『必ず役に立つ 吹奏楽ハンドブック 指導者編』ヤマハミュージックメディア、2013)。著者の経験をもとに、合唱指導法

と授業での合唱やクラス合唱、合唱部の運営法が書かれているもの(竹内秀男『合唱指導の実際と運営 実践的アプローチとCD付指導例』音楽之友社、1992)。これらには、いずれも、演奏会の運営や楽曲例等について触れた部分がある。しかし、配布用プログラムの作成に関する記述はなかった。

- 17) 芳賀均・佐藤友夏「月刊誌『教育音楽(小学版)』の記事における指導過程の検討—音楽鑑賞に関わって—」『旭川実践教育研究』20、北海道教育大学旭川実践教育学会、2016、pp.21-21。

[附記1]

本稿の【図1】～【図3】中の「モーツァルトの肖像画」(https://ja.wikipedia.org/wiki/ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト#/media/File:Wolfgang-amadeus-mozart_1.jpg)、および、「モーツァルトの家族」(<http://www.mozart.or.jp/data/portrait/>)は、パブリックドメインに帰したものである。

また、【図4】中の「パッヘルベルの肖像画」(<http://tsvocalschool.com/classic/wp/wp-content/uploads/2016/02/Johann-Pachelbel.jpg>)、および、「カノンの譜例」([https://ja.wikipedia.org/wiki/カノン_\(パッヘルベル\)#/media/File:Pachelbel-canon-colors.png](https://ja.wikipedia.org/wiki/カノン_(パッヘルベル)#/media/File:Pachelbel-canon-colors.png))は、パブリックドメインに帰したものである。「パッヘルベルの肖像画」については、パッヘルベル本人ではないとの説があるが、現在、この肖像画が流布しているようである。

[附記2]

本研究の〈1〉〈4〉〈5〉は山内・芳賀・千葉の共同によって行ったため抽出は不可能である。〈2／(1)〉〈2／(2)〉の3～5段落は芳賀が、〈2／(2)〉の1・2・6段落、〈3〉は山内が担当した。配布用プログラムは千葉が監修した。

作稿においては、〈1〉〈2／(1)〉〈2／(2)〉の3～5段落は芳賀が、それ以外の部分は山内が担当した。

【附記3】

本稿は、日本学校音楽教育実践学会北海道支部例会（平成30年1月27日（土）札幌市生涯学習センターちえりあ）における発表を基に再構成したものである。

（山内 芳春 旭川校大学院生）

（芳賀 均 旭川校講師）

（千葉 圭説 北翔大学准教授

・旭川校非常勤講師）

